

入院第12日めー

イエスはさぞ痛かっただろう

7

ぼくはまだこのドクターたちを許していない。この人たちは、ぼくにろくな説明をせず恐るべき地獄の沙汰を味わわせたからだ。あれ以降2ヶ月になろうと言うのに今なおその古傷が痛むからだ。

A循環器クリニックというところが元麻布にある。ここはかつて確か核医学研究所と呼ばれていたところだと思う。循環器系の検査で、核磁気共鳴断層撮影を専門に行っているクリニックだ。ぼくはA病院に入院するたびに、ぼくが「付添いなしでタクシーでここに外出させられ、心臓の断層写真を撮ってもらっていた。その撮影は丸一日拘束されること以外は格別苦痛もなく、一人で行かされる不安はないことはないが、むしろ一人で蕎麦屋など選んで食事する自由を楽しむといった気楽なものだった。むしろこの検査は、カテーテル検査のような危険と苦痛と日数が要求される検査に代わる精度の高いものとの説明を受けていたので、核医学の「核」という点に若干の引っ掛かりを覚える程度で、受け入れていた。

主治医(女医)の土井ドクターが、下肢と肺に静脈血栓があるかどうか検査するために、すでにお馴染みのAクリニックにぼくを向かわせた。検査の目的は聞かされたが、その具体的態様は聴かされなかった。検査も1時間ほどで終わるといふし、楽勝気分でタクシーに乗った。Aクリニックのドクターが「お久しぶりです」と挨拶をして、簡単な診察した後で、「この検査でうまく写るのかなあ」とか「これはやりたくない検査なんですよ」などと言う。けれどもぼくは1時間後の蕎麦屋についてイメージとレーニンをして、ドクターの言葉を意に介さなかった。

ドクターと技師がぼくを分娩台(じつは見たことがない)のようなベッドに寝かせた。なんだかヒジョーに身の危険を感じた。次の瞬間、「かなり痛いですよ」と言って、ドクターだか技師だか知らないが、誰かがぼくの一番痛い左足の内側のくるぶしに太い(と直感した)針をぶす、ぶすぶすと深ぶかとさしこんだ。「ごめんなさいね。痛いでしょう?だからやなんだよこの検査は」といって、次に「右足

に行きますね」といって、右足の甲の部分にぶすつと刺し込んで失敗した。(失敗するなよ。足首から先は神経が集中しているところなんだよ)そしてそれを抜いたときにうめき声が不覚にももらしてしまうほどの激痛だった。そこで右足の左右対称的な内側くるぶしにぶす、ぶすぶすと針を刺し込んだ。

そうです。磔の状態だ。そして針からアイソトープだかなんとか分からない物質を注入しつつ、そのまま姿で30分ほどかけてほぼ全身の断層写真を撮ったのだ。

撮影が終わり、針を抜くときの倍増した痛みを味わい、蕎麦屋に寄れるものではなくクリニックの玄関にタクシーを呼んでもらってA病院に帰院した。

自分の病棟のエレベータのところで土井ドクターと出会った。彼女は「どうでした?大丈夫でしたか?」とせき込んで尋ねた。ぼくはごう然と言い放った。

「いやー。ぼくはちっとも痛くはなかったんだけど、イエス・キリストはさぞかし痛かっただろうと思います。釘を打ち込まれたときも痛かったかもしれないが、復活のために抜いたときの方がもっと痛かっただろうと思います」

彼女は、同情などせず「イエスも島岡さんもこうやって無事復活できたからよかったじゃないですか」

